

書

橋爪若子：オーストラリア入門

古今書院，1985，190頁，1,600円

オーストラリアと日本とは、貿易を通じて経済的に非常に密接な関係がある。しかし、地理の教科書で、オーストラリアについてあまりページが割かれていないこともあって、我々のオーストラリアについての知識は、非常に乏しいと言わざるを得ない。我々は日本と密接な関係にあるオーストラリアについて、もっと知る必要がある。さらに、北海道とオーストラリアを比べると、比較的開発が新しいという共通点ばかりでなく、厳しい自然環境（北海道の厳しさは寒さであり、オーストラリアの厳しさは乾燥であるが）と戦いつつ、今日の生活圏を築き上げてきたという、歴史的風土の共通性を見出すことが出来る。こうした点からも、オーストラリアについてより一層理解する必要がある。

オーストラリアについて調べようとしても資料がほとんどない。この資料不足がオーストラリア理解の重大なネックとなっているのだが、本書の登場は、このネックをまたひとつ小さなものにしたと言うことが出来る。

本書はエピローグにもあるように、オーストラリアの苛酷な自然の姿と自然破壊の恐しさについて、著者の「限られた体験の中から、ぜひお伝えしたいことだけを書いた」内容となっている。本書は4つの章からなり、はじめの2章で前者のテーマ、後半の2章で後者のテーマについて述べられている。

「苛酷な自然」と題した第1章では、世界一乾燥した大陸としてのオーストラリアの自然の厳しさについて、土壌侵食、塩害、早魃、野火の問題を取り上げて論じている。著者はオーストラリア大陸のイメージを「赤い土と濁った河」としてとらえる。この赤い土のイメージは、レッド・クリフスやミルドゥラ（オーストラリア原住民の言葉で赤い岩）などの地名にも反映している。土壌侵食のすさまじさの実態、そしてその原因が、貧弱

評

な土壌、羊や牛の過放牧ばかりでなく、イギリスから流刑囚と共に運ばれてきた数10匹のウサギが繁殖したことによる話など、現地調査をしている者ならではの内容となっている。

塩害については、著者の専門分野でもあり、具体的な数字を挙げつつ解説している点は、実証的でかつ非常に参考になる。早魃、野火（オーストラリアでは山火事をのことを bush fire と呼ぶ）については、1982年から83年にかけての大早魃とそれに伴う山火事の実態が紹介されており、up-to-date な情報を知ることが出来る。

「貴重な水資源と灌漑開発」と題した第2章では、オーストラリアの代表的河川であるマレー川とその流域の灌漑農業地域について、マレー河畔の都市ミルドゥラ周辺を例に取り上げて論じている。

オーストラリアにとって、マレー川は世界で最も乾燥した大陸に与えられた神の恵みであり、エジプトのナイル川にも匹敵する貴重な存在である。この川の水を利用して、マレー川流域では果実栽培を中心とした灌漑農業が営まれている。ブドウ、オレンジ、レモンなどがこの地域の主要作物である。灌漑農業地域でも、塩害と土地生産性の低下が問題になっているという。また、マレー川自身も農業排水などが原因となって、汚染が進行している。

「空虚な大陸から人種のるつぼへ」と題した第3章では、たくましい開拓者の子孫たち、そして様々な国からやってきた「新オーストラリア人」について紹介している。開拓者の子孫たちについては、「気さくで親切な人たち」としつつも、「気のおけぬ反面、激しい気性」をも持ち合わせていることを、実体験をまじえて論じている。

最近では、英国からばかりでなく、ヨーロッパ各地、そしてアジア各地からの移民が増えている。このような移民の増加、つまり多民族化を表わすのに、“ethnic”という言葉がよく使われる。エスニックぶりは、いまでは大都市ばかりでなく、周辺の地域にも広がって、とかく単調なオーストラ

リアの町並みや生活ぶりに色どりを添えているのである。

「たくましいオーストラリア人たち」と題した第4章では、現代のオーストラリア人の気質について、独特の方言から始まって、怠け者であり働き者であるオーストラリア人、保守性と強い州意識、オーストラリア式ホスピタリティなどの話題を取り上げて論じている。オーストラリアの英語にも、スタイト (state, 州) によるなまりの違いがあるという。ハキハキしたしゃべり方や間のびしたしゃべり方がある。例えば、熱帯地方の人たちの英語はすぐそれとわかるらしい。

本書のうちで、オーストラリアの苛酷な自然の姿と自然破壊の恐しさを扱った前半の2章が特に読みごたえがある。体験をもとにしているために、内容は南東部のごく一部の地域に限られるが、反面非常に説得力をもつ。データの生々しさがこれら2章の特徴と言える。また、オーストラリア人の気質や生活について論じた後半の2章も、一般論にとどまっていない。著者自身の経験をもとに、感じたままの姿が付け加えられてあり、著者の体験的オーストラリア人像を知ることが出来る。

しかし、本書で不満がまったくないわけではない。例えば、図表がほとんどないことだ。写真は各所に挿入されており、本文を理解する上で、重要な手助けとなっている。ところが、はじめにオーストラリア全図が示されているだけで、その後まったく図表が出て来ない。もう少し図表を入れてほしいと思う。また、第1章で論じられている土壌侵食のすさまじさは、空中写真、分布図などを加えれば、さらに説得力が増すと思われる。オーストラリアの空中写真は日本からでも購入可能である。

もうひとつ気になることは、オーストラリア大陸中心部の記載である。本書の記載を総合すると、オーストラリア大陸内部の乾燥地域は、「雨一滴降らない」「いわゆるソルト・ブッシュのたぐいしか生えない」「驚くほどサハラと似ている」地域になってしまう。

しかし実際には、雨が少ないと言っても、年間100 mm程度の降水があり、非常に密度は低いもののアカシアの疎林となっており、景観的にはカラハリ砂漠に似た地域である。これらのことは現

地に行かなくてもわかるはずである。

このほかにもいくつかの気になる点が残るが、全体としては非常に貴重な情報を我々に伝えてくれる内容となっている。本書を通じて、オーストラリアをよりよく理解する人が、1人でも増えることを祈りたい。(岩崎一孝、北海道大学文学部)

郷土と科学編集委員会編：続北海道五万年史

郷土と科学編集委員会，1985年

455頁，4,000円

北海道教育大学札幌分校地学教室内に地学教育連絡会（以下、地教連と略）というのがある。地学教室の卒業生だけでなく、道内の地質、考古などの研究者が広く加わり、地学教育の向上と普及、地域研究の活動を行い、今年で創立30周年を迎える。また、会誌「北海道の地学」を1954年に創刊し、これは途中で誌名が「郷土と科学」に変わったが、1986年4月現在で創刊以来97号を数える。この会の特徴は、小・中・高の各学校の教師の教育、地域研究の活動を中心に、研究者がこれに助言、参加する形態をとり、研究内容も地質、天文の地学ばかりでなく、地形、気候、植生などの自然地理、さらには考古学など歴史にも及び、広範な自然史を扱うものである。会誌に掲載される内容も、教育的配慮に加え、研究レベルでもかなり高度のものを含み、現場の教育レベルとの統合が図られていることもユニークである。

地教連では、創立30周年を記念して、いわば北海道の自然史の集大成ともいえる本の刊行を1970年代後半より企画し、第1冊は1980年3月、「北海道5万年史 一地域教材の研究をすすめるために一」と題し、「郷土と科学」No.73-80の合冊として刊行された。

本書は、タイトルのようにこの続編で、記念事業の完結編として、同誌No.93-96の合冊として1985年12月に刊行された。このシリーズは、会誌の合冊といっても独立した単行本の体裁をとっている。また、本書のねらいや構成も基本的に前編と変わりなく引き継がれているので、本書を読めば前編の内容も想像でき、また多数の写真、図版を用いている。

本書は、第IV部〔続〕自然界の変遷、第V部〔続〕人類の足跡、第VI部子どもたちのために、あしたのために―自然を守り教育を創りだす運動のなかから―の3部で構成され、前編からの連番であるが、各部の内容は前編の第I～III部にそれぞれ対応する。ただ、第VI部は、前編の第III部「地域教材の研究をすすめるために」から題名が変わっているが、各部とも一貫したねらいを持つ。

以下に各部の項目を紹介しよう。

- 第IV部：A 中生代の海洋底を探る
B 北海道の古脊椎動物
C 駒ヶ岳の火山活動史とテフラ
D 大雪火山と十勝火山
E 利尻火山の活動史とテフラ
F テフラの対比をすすめるために
G 北海道の古気候
- 第V部：A 北海道の遺跡
B 旧石器時代の北海道
C 標茶町二ツ山遺跡第3地点の調査
D 縄文時代の墓制
E 北海道の黒曜石の産地と判別法
―同位体化学の利用―
F 放射年代測定法の解説
G 北海道の放射年代等一覧表
- 第VI部：A 父なる大雪、母なる石狩に抱かれた科学運動
B 地域の素材の教材化について
C 十勝団体研究会から十勝の自然史研究会へ
D 地域教材を明らかにするために
〈ノウハウ〉 カラーライド複製のために

以上の項目から想像されるように、第IV、V部ではそれぞれ北海道の地史、先史遺跡を特徴づける具体的なテーマ、地域素材さらには研究方法について研究者が詳細に解説し、第VI部では、これらを教育あるいは地域研究でどう生かしてきたか、いわば、現場での実践の記録である。前者では、地域素材や研究方法の解説のほかに、例えば「中生代の海洋底を探る」では北海道の造山、海底周辺を含めた地質構造論が新しい造構論に基づいて述べられ、また「北海道の脊椎動物」、「北海道の古気候」、「北海道の遺跡」などのようにテ-

マに関して最新の研究段階がまとめられており、研究の指針として大変に役立つと思われる。

また、「北海道の放射年代等一覧表」は、1984年12月末現在まで発表された道内の年代各測定資料(^{14}C 年代、水和層年代、サーモルミネッセンス年代、フィッシュン・トラック年代、K-Ar年代、Rb-Sr年代)を網羅したものである。この記載は、試料に関する管内名、市町村名、地層・遺跡・層準などを合わせた試料の種類や出所も一覧表に加わり、さらに文献もフルネームで索引でき、 ^{14}C 年代については英文による測定機関とその住所まで掲載になる詳細さである。地方段階でもこのようにまとめられたのは全国で最初であり、研究者のみならず多方面での資料的価値が高いものである。編集者の労苦を多としたい。

第VI部は、前編では、例えば「大雪山を歩く」の項目のように具体的な素材に関して教育現場、とくに巡検では役立つ資料とその解説になっているのに対し、続編では、おそらく多くの会員が地学団体研究会に属し、歩みを共にしてきた経験から、地学教育、地域研究の歴史やエピソードを織り混ぜ、科学の方法論にも言及している。前編と合わせて読むと興味深い。

第IV、V部は、内容的に教育現場にとって高度な面があるが、これは前編と同様、地域の研究を通して教育現場に生かす、そのため教師自身も地域研究の方法を身につけるといふ地教連の歩みを反映したものといえる。本書の構成は地域的に系統的に編まれたものでなく、また紙数の関係で記載されない地域の素材もあるが、将来これに付加する形で同じような書が刊行されれば、より充実して行くであろう。地理学、あるいは歴史学にも内容が関係し、教育現場でも役立つ好著である。

なお、前編は絶版であるが、本書は道内主要都市の大きな書店で販売されている。

(直接の申込先：郷土と科学編集委員会；振替小樽7-6602)

(大内定、北海道教育大学札幌分校)